
それぞれの幸せ

てるり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

それぞれの幸せ

【コード】

N8956A

【作者名】

てるり

【あらすじ】

人にはそれぞれの幸せがある。「とりあえずの幸せ」の番外編。

1話 玲の場合

玲の場合

誰が言い出したのか、お祝いをしようということになった。独身最後の男性だけの集まりとくれば、思い出にでも女の子のいる店に行くだろう。しかし、この時は違った。

弁護士になった一人は、出世に影響する場合がある、と言った。本当か冗談か、よくわからない。

お笑いを目指している一人は、金がない。これは本当だ。飲食店を手伝っている一人は、うまくて安い店を知っている。

そこに、祝ってもらおう本人の文句など誰も聞かないと言う事実が加えられて、集まった全員はただの店にいた。

店は、ほとんど客がいなかった。どうしてそうなのか。それは味の問題ではなく、立地の問題だということがすぐにわかった。

「あ、うまい。さすが、隆史。」

「だろ。母さんと食事めぐりに来るんだ。そんなに混まずにうまい。これほどいいところはない！」

「同じような体型、二人でか？」

玲はからかった。まあ、事実でもある。

「それにしても、進は遅いな。」

浩介は入り口のほうを見つめたが、ドアが開く気配はない。

「まあ、遅れると連絡が入ったことだし、来るだろう。」

「そういえば、俺、気になっていたことがあるんだよね。」

思い出したように隆史が言った。

「なんだ？」

「俺と浩介は中学時代からの友だちだけど、お前らは小学校からだろっ？」

「そうだけど。」

「なんで、進と仲良くなったんだ？」

「あー、俺も思っていた。別に進は頭は悪くないけど、秀才ってわけでもないだろうし。別に人並みに付き合いがいいわけでもないからなあ。」

浩介もずけずけと言った。

その時のことをも出だしてか、玲は笑った。

「ああ、あれは、俺の親が離婚したところから始まるんだ。小学校三年くらいの時かな？父親は愛人が何人もいたから、母親とのケンカが絶えなくてね。近所のみんなも知っていることだったんだ。愛人の一人に子供ができて、ついに離婚。俺は母さんと一緒に暮らすから、苗字が変わったんだ。いじめられてねえ。」

殴られた顔が痛むのか、ついしかめた顔をしながら歩いていた。

その頃の彼は、ただのクラスメイトの一員でしかなかった。しかし、その日の夕方のこと、グラウンドの前で急に後ろから声がした。

「まて！」

傷だらけの状態で俺が振り返ると、そこに、真っ黒にやけた進がいた。バットを持っていたのは、今まで野球をやっていたせいらしい。これで殴られたら、さすがに骨が折れるだろうなあと考えていた。

「なんだ、その顔。それ、やったの、二組のごとーだろう！」

「なんで、わかるの？」

「ここまで殴るのは、あいつだけだ。」

きびすを返したように、進はごとーのところまで走り出した。後ろから蹴りつけて、ケンカを始めた。バットは途中で投げ捨てて、素手で向かっていつていた。

「てめえ、ごとー、名前が変わったからって、殴るな！」

「だって、あいつの家、離婚したんだぞ？」

「だから、なんだ、うらやましかったら、お前も名前、変えてみる

「！」

「うわ、馬鹿だ。」

浩介があきれたように言った。

「はははは。俺も、あのときはそう思った。まだ離婚の意味もわかってなかったんだと思うよ。しかも、あのころは元気だったよ。寒くなってきた頃だったのに、ランニング姿だったしね。」

「ガキ大将みたいなもの？」

隆史は、もう肉を食べ始めていた。

「いや、ただのわんぱくな子だった。」

「あれ？そうなの？」

「で、ごとーとの乱闘で先生に怒られたんだけど、進は俺のことは話さなかったんだ。まあ、二人はしょっちゅうやりあっていたから先生も原因究明に熱心でもなかったんだろっけだね。」

「へえ。その、後藤君っていうのはどうなったのさ？」

隆史は、二人が話している間に、なにやらこっさり注文を追加しているようだ。

「後藤じゃない、ごとーっていうのは、あだ名なんだ。進がつけたらしいんだ。理由はよくわからないけどね。彼はあいかわらず、暴れていたけど、小学校の卒業の時に引越して行ったよ。」

「へえ。暴れてねえ。進は意外だ。強かったのか？」

「二人とも、空手をやっていたらしいよ。それで進と知り合いだったようだ。同じ教室の仲間なのに、どうしてあんなによく、ケンカしていたのか、理由はわからないけどね。進にはよく、かばってもらったよ。」

「それで、おまえらが仲良くなったのか。」

「やっと口が開いたのか、隆史が、言った。」

「あ、来た。」

玲が気がついた。

「ごめん、遅くなって。」

ドアのほうを見ると、進はぺこぺこしながら来た。

「道に迷った。」

「罰としていつき飲み。」

浩介が酒をちよつと持ち上げてみた。

「ダメだ。倒れたりしたら、真雪君にやられるぞ。ついでに、ダブルのお父さんたちに。」

玲はおどけたように言った。

「あー、そら、怖い。」

「さあ、乾杯だ。」

それぞれがグラスを持ち上げて、飲んだ。

玲はちよつとその後のことまで思い出していた。

「どうしたの？その傷！」

家に帰ると、母親は心配そうにやってきた。傷だらけの息子を見れば、誰だつて心配するだろう。

「別に。」

「だって、こんなに。……名前が変わったせいなの？やっぱり、学校でいじめられているの？」

母親は目を伏せた。

「別に。名前が変わっても、側にいてくれるやつもいるもん。」

「そう？でも、辛かったら転校してもいいのよ？」

「ううん、いい。僕、おばあちゃんのところには行かない。母さんと、ここにいます。進と一緒にいるんだ。でね、今度はあいつが困ったら僕が助けてあげるんだ。」

玲はにっこりと笑った。

「僕、あいつと一緒にいる！」

その言葉通り、玲は進と一緒に、中学、高校生活を送った。進と同じ高校に進級しようとしたところ、中学時代の担任は言った。

「おまえなら、もっと上の高校も狙えるぞ。友情より、将来のこと

を考える。」

他にも、

「別に同じ高校に行かなくても、友人のままでいられるだろう？」
「何度も言われた説得にいいかげんにイライラしたのか、玲は言った。」

「じゃ、滑り止めで受験します。」

そして、担任の推薦した高校を第一志望にして、そのまま時間が流れていった。

その後、どうなったか。玲は第一希望で提出した高校に受験をしに行った。しかし全部の解答をずらして書いた。当然、不合格となった。

もっと上の学校を受験できたにもかかわらず、進と同じ高校に行き、側にいた。この高校生活では三年間首位から落ちたことはなかった。

進は別に自分のためなどと、思いもしなかったようで、さんざんからかった。

「馬鹿だなあ。普通、見直しかするだろう？自信がありすぎるからそういうことになるんだ。」

「そうかもな。」

玲も一切、本当のことは言わなかった。

中学時代の担任は、さすがに言葉がなかったようだった。わざとだと気がついていたのでかもしれない。まさか、そんな行動に出るとは想像さえもしなかったようだ。

母親は、責めたりしなかった。好きなように進んでいいと言った。

そして、高校以降の進路を決める時になって、もっと先を見つめ始めた。

つまり、ずっと進と一緒にいることを。そのために、足手まといにならないこと、困った時に頼れる人物になること。そのなかで、予算との関係で進は弁護士の道を選んだ。ちよっと離れていた大学

生活は思ったよりも、そんなに離れているという実感がなかった。
あつという間に時間は過ぎていった。

「そういえば、玲もおめでとう。」

進の言葉に急に玲は現実に戻ってきた。

「ん？」

「弁護士になつたんだろう？」

「ああ。と、いつても、先生の下でしばらく勉強だけどね。裁判と
かはまだまだ先だろう。」

「へえ。そうなんだ。」

浩介は、感心したように言った。

「なにかあつたら、頼れるなあ。」

いつのまにか隆史はお茶漬けを食べていた。

「隆史、米粒を飛ばすな！」

「そうだなあ、お前の離婚の時なんか。」

浩介は意地悪そうに言った。

「おい！俺はこれから結婚するんだぞ！」

「まあまあ、進、幸せになれよ。」

「ああ。」

玲が持ち上げたグラスに、進は音を鳴らせて、乾杯をした。にっ
こりとお互いに笑った。

これが、玲の選んだ幸せだった。

2話 隆史の場合

隆史の場合

「デブ。」

「近づくなよ！」

中学生の頃の隆史はひたすら、いじめの対象になっていた。その日もあれこれ、言われて、隆史は落ち込んでいた。海のように深いため息をついた。

「はあー。」

学校の屋上からの夕日がきれいだった。金網の向こう側がやけに広く感じられた、そのときに、チャイムが鳴った。

「そろそろ、ここも閉まるよ。」

急に声かして振り返ると、同じ制服を着た男の子が立っていた。どうやら、本を読んでいたようだ。隆史は、ドアを開けて、そのまますすんでいったために、彼の存在に気がつかなかったようだ。彼はそれだけ言うと、出て行った。しばらく夢でも見ていたのかとぼんやりしていると、制服をきたガードマンがやってきた。

「閉めますよ？」

隆史は慌てて、屋上から出て行った。

次の日。その男の子がクラスメイトにいた。

「やあ、ども。」

「どうも。」

「俺、黒田。坂本君だよな。」

「そうだけど、何か？」

「え、えつと。」

隆史がもごもごしている間に、誰かが隆史の肩を叩いた。

「おいおい、デブが秀才になんのようにだー？」

「え、えつと。」

「なにか、用があったとしても、君には関係ないだろう。」

普段は大人しい玲が言ったせいだろうか、からかった生徒も、面食らったようで大人しく離れた。

「あ、あの。」

「チャイムだよ。」

玲がそう言うと、きっかりに鳴った。

「あ。」

隆史は慌てて、席に戻った。下に落ちて、ちらばっている教科書も拾い集めた。ぶつかっただと言って、ついでに机の中の教科書をばら撒いていくのだ。机の上にも、文字がたくさん書かれている。ひどいものは、油性ペンでかかれていた。

昼休み。

「玲。めしー。」

「ああ。」

隣のクラスから進がやってきた。

「君も来る？」

玲は隆史に声をかけた。

「い、いいの？」

隆史は進のほうを見つめた。

「俺は別にいいけど。」

「うん。」

隆史は嬉しそうにパンを取りにロッカーに行った。こっそりと、聞いてみた。

「なんかあったのか？他の人を誘うなんて珍しい。」

「いや、この間、ここで本を読んでいたら、深いため息をついていてね。ちよつと心配になった。死んだら、困る。」

玲も小声で答えた。

「よし、広場で食うぞ。」

そこは、広い空間があつて、昔あつた教室の椅子や机がそこに置かれていて、誰でも勝手に利用してもいいように置かれている場所だった。

「ど、どうも。俺、黒田 隆史。よろしく。」

「俺、林田 進。玲とは小学校からの付き合いだ。それにしても、そんなに食うのか？」

進は目を丸くした。

「う、うん。太っているせいか、お腹がすくんだ。それに、お腹が鳴ると……。」

隆史は言葉を濁した。どうやら、クラスメイトにからかわれるようだ。パンがつぶれているのが印象的だった。おそらく、誰かにつぶされたのだろう。しかし、味に問題はないようだ。隆史はパンを開けて食べ始めると、急に玲の持っている弁当を見つめて言った。

「あ、うちの弁当！」

「うちの弁当？」

「彼のうちは弁当屋だ。ほら、学校の近くにあるだろう？」ああぞら弁当」って、店だ。」

玲が言った。

「知っているの？」

「俺は毎朝、あそこで弁当を買っている。うまいんだ。親が働いているんで、弁当を作る暇はないし、学校の弁当はいまいちだからな。」

自分の家の弁当を誉められたせいか、やけにうれしそうだが、隆史は続けていった。

「で、でも、それ、「青弁当」じゃないか！先着五人までしか買えないんだよ？」

「そうなのか？」

進は初耳だったようだ。

「さあ。」

玲も知らなかったようだ。

「え、それ、いつ買ったの？」

「今日の朝。」

「朝……。俺が起きてくる時には売り切れてるんだよ、それ。」

「ああ、新聞配達の帰りに買ったんだ。」

「新聞配達……。」

「で、なんで弁当屋なのに、パンなんだ？」

進が聞いた。

「え、あ、ああ。その、家で弁当のおかずを食べてくるから、昼はパンと違って。」

「へえ。夜は？」

「夜も、おかずなんだ。次の日まで弁当を残しておけないし。」

「やっぱり、そうなんだ。」

「う、うん。そのせいか、ちょっと油っぽい匂いがするんだけど。」

「ごめんね。」

「ん？気にするな。から揚げとか、コロツケのせいだろうか？」

そのコロツケを食べながら、玲が言った。

「うん。男性をターゲットにしているから、つい、がっちりしたメニューになりがちになるんだ。」

「おい、早く食べないと、そろそろ鳴るぞ。」

「やばい、こいつが言う時は本当に鳴るんだ。早く食べえ！」

「う、うん。」

「う、うん。」

三人は黙々と食べた。

「あと、三分で鳴るな。教室に戻るぞ。」

「あー、じゃ、またな。」

進は慌てて走っていった。

「ああ。」

「そういえば、林田君はクラスどこ？」

「七組だけど、次、生物室に行かなきゃいけないみたいだから。」

「ああ、それで、急いでるんだね。」

隆史は納得したようにいった。教室に戻りながら、二人は歩いて

いた。急に後ろから声がかかった。

「あれ、デブ、どこにいたんだよ。」

「え、えっと……。」

「俺と一緒に飯に。なにか？」

代わりに玲が返事をした。

「い、いや。」

声をかけたクラスメイトは、そのまま素通りしていった。

翌日。昼休みに、祈祷と同じ広場で進と玲の二人が仲良く、弁当を食べていた。

「休み？」

「ああ。急にな。」

「店は？」

「通常どおり、やってた。」

玲は弁当をちよつと持ち上げて見せた。

「さぼりか？」

「かもな。いままでさぼってるのを、一度も見たことないけどな。」

「……なんか、嫌な感じがすんだけど？」

「俺もだ。彼のことを一番からかっていたやつが、殴られたような頬をしていたんだ。」

「ケンカかなあ。」

「かもな。帰りに弁当屋によって見る。」

「俺も行く。」

「いいのか？」

「別に家に帰ってもなにかあるわけじゃないからな。」

進は肩をすくめてみせた。

外見はとても隆史に似ていて、恰幅のいい感じのおばさんがそこにいた。店のおばさん、つまり、隆史の母親は玲のことを覚えていたようだ。

「ああ、毎朝、買っていつてくれるお客さん。息子と同じ学校の子だったのかい。」

「あの、隆史君は？」

「……入院してね。」

「入院？！」

自然に二人の声が大きくなった。

「ど、どうして？」

「ケンカをしたらしいんだけど、相手の人数が多くてね。たいした怪我じゃないみたいだね。ちょっと内蔵を調べるための入院だから、すぐに学校に出て行くよ。」

「どこの病院ですか？いまから見舞いがてら、行きます。」

「あら、行ってくれるの？」

「はい。」

「あ、じゃ、これお願いしても良いかしら？ちょっと店が忙しくてね。」

おばさんは荷物を渡した。ついでに病院と病室も聞いた。

「これ、渡せばいいんですね？」

「頼むね。」

「はい。」

二人はそのまま病院へと向かった。病室を覗いてみたが、いなかっつた。カバンを置く。

「いないな。」

「トイレか？」

「ん？ここのでつかい男の子かい？」

急に入り口から入ってきたおじさんが言った。

「はい。」

「あの子なら、上に行ったよ。」

「上？」

「ああ、エレベーターで上がっていったぞ。誰か知り合いでもいるのかもな。」

進は無意識に例のほうを見ていた。どうやら、二人して同じことが頭に浮かんだようだ。

「急げ！」

どたばたと二人は走った。

「病院の中は走らないでください。」

後ろから看護士の声が聞こえたが、気にせず、二人は屋上に向かっていった。すると、隆史はドアの前で座り込んでいた。

「く、黒田君。」

隆史は顔を上げた。息を切らしている二人を見て、目を丸くした。

「ど、どうしたの？」

「それはこっちの台詞だ。入院なんかして。大丈夫か？」

「う、うん。平気。明日には出られるって。」

ほっとしたように、玲はいった。

「そうか。で、ここできなにしているんだ？」

「え、えっと、屋上に行こうとしたら、閉まってるんだ。安全のため。」

「じゃ、病室に戻るぞ。お母さんからの荷物を持ってきたからな。」

「う、うん。」

隆史は素直に、歩き出した。病室に行くと、母親がいた。

「どこ行っていたのよ？」

「あれ？どうして？」

「おじさんが手伝いに来てくれたのよ。で、あんたが心配できたの。どう？体は。」

「うん、ちよつと足を捻挫したみたいだけど、それだけ。」

「じゃ、明日から学校にこられるな？」

玲が言った。

「捻挫じゃ、入院はできないよなあ。」

進も言った。

「じゃ、また明日な。」

肩に手を置いた。

「う、うん。」

「よし。」

進と玲はちよつと手を上げて、病院から出て行った。

「ドア、開いてなくてよかったよな。」

ポツリと進が言った。

「ああ。飛び降りていたかもしれないよな。」

「明日、くるかな？」

「よし、明日、朝弁当買いがてら、起こして一緒に学校に行ってもいいな。」

「お。いいかも。」

二人は夕日の中を歩いていた。

一方、隆史は夕方には退院できた。

「いい友達がいるのねえ。」

母親がぼつりと言った。

「うん。明日、一緒に弁当を食べるんだ。」

「怪我は平気なの？」

「うん。ほら、俺、おじさんに柔道、習っているから、結構頑丈だし。」

「そうね。」

母親はちよつと笑った。

隆史もちよつと笑って見せた。

怪我のことは、誰もなにも聞かなかったし、隆史も言うことはなかった。しかし、それ以来、隆史をからかう人は誰もいなくなった。

3話 浩介の場合

浩介の場合

ヒソヒソヒソ。

大抵の場合、噂話というものは本人のいないところで言われているものだ。そして、言っている本人たちはそれが聞かれていないと思っただけでいることが多い。

だが、この場合は違った。

「浩介君って、明るいつていうよりうざいよね。」

「ああ、いつていることもつまらないしな。」

「自分じゃ、おもしろいと思っっているんじゃないの？」

「結構、うつつうしいよねえ。」

ひそひそひそ。

たまたまその日、忘れ物を取りに学校に戻った浩介はその噂話を偶然にも耳にしていた。

浩介はさすがに、平然とした顔をしてドアを開けることはできずに、そのまままっすぐ帰宅した。泣けもせず、ただひたすら落ち込んでいた。噂話をしていたのが、いつも自分が、それも小学校の頃から一緒にいた人たちだったなら、なおさらだろう。

翌日。

できる限り浩介は平静を装って、学校に行った。すると、仲間たちはまるで何事もなかったように、いつも通りに会話をしていた。浩介はぞつとした。あの噂話が夢であったかのように、なにも変わらなかったからだ。

昼休み、弁当を持ってきているにもかかわらず、仲間と長く平気な顔をして側にいる自信がなかったせいか、浩介はパンを買いに出かけた。すると、目の前で売り切れてしまった。「なんだかなあ…」

…。」

「ああ、買いそびれ？じゃ、これ一個やる。」

急に大きな体の生徒が言った。

「オレ、もう三つ買ったから。ハイ。」

「あ、どうも、いくら？」

「いいよ。それよりも、うち、弁当屋なんだ。学校の近くの『あおぞら弁当』ってところ。気が向いたら、買ってね。じゃ。」

彼はそれだけ言うと、そのまま去っていった。

「なんだあ？」

浩介はとりあえず、パンを持って仲間の元へ戻った。黙って、食べていると、一人が言い出した。

「なんだ、やけにおとなしいな。」

「そう？」

「熱でもあるのか？」

「いや。」

「なんか、変な感じがするわねえ。」

浩介は苦笑いをするしかなかった。

帰りもちよつと用があるからと断って、しばらく教室に残った。

やることのない放課後はやけに無駄な時間に思えた。

「おい、岡本。」

振り向くと、そこには担任の先生がいた。

「ちよつと時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃ、プリント折るの手伝ってくれ。明日の進路説明会で使うんだ。急ぐんだよ、頼む。」

「えー。しょうがねえなあ。」

しぶしぶながら、手伝いに行くと、もう手伝っている生徒がいた。

「あれ？パンくれた人じゃん。」

「ん？黒田と知り合いなのか？」

「いや、しらねえ。」

「まあ、とりあえず、お前はこれを二つ折りにしてくれ。」
なにやら、ほかにも何人かの生徒が残っている。

「機械はどうしたんだよ。」

「故障したから頼んでるんだ。」

それだけというと、先生はどこかへ行つた。浩介は近くから椅子を引つ張つてくると、二つにたたみ始めた。しぶしぶやっているせいか、几帳面とはかけ離れたことになっていた。

「隆史、どうだ？」

「ああ、まだあるよ。手伝つて。」

「一年生なのに、進路ねえ。しょうがねえなあ。玲は？」

「バイト。」

浩介はぼんやりとその話を聞いていた。

「おい。おいつてば！」

やっと、浩介は自分が話し掛けられていることに気がついた。

「なに？」

声のしたほうを見ると、大柄な生徒に声をかけた生徒が言った。

「そのプリント、折るの逆だよ。ほら、お手本。」

「え？」

たしかに、よくみると、お手本と間違っていた。そのまま、折りつづけてしまったようで、結構な枚数になっていた。

「あー……。すりなおしたほうが早いかも。」

「あ、無理。」

大柄な生徒が言った。

「コピー機が壊れて、いま、古い印刷機を出してくるってさっき、先生が言っていたから、それくらいなら、折りなおしたほうがいいよ。」

「えー。面倒だなあ。」

浩介は渋い顔をした。

「じゃ、そこどいて。」

「え？」

「俺がやる。いてもやらないなら、帰れば？」

浩介は無言でどいた。カバンを持って、そのまま帰った。なんだから、無償に腹が立っていた。

翌日に配られた進路の資料は、ちゃんと直されて配られた。

「お前、どうする？進級だろ。」

目の前にいた仲間たちはなにやら、話している。

「ああ、どこの高校に行くかはまだ決めてないけどな。」

「俺、決めたもんねえ。」

「行けるのか？」

なにやら、ああでもない、こうでもないと話している。しかし、誰も浩介にどこに行くのか聞く者はいなかった。そのことに初めて気がついた。誰も自分のことに関心がないんだということに。急に独りぼっちになったような気がした。

「あ、おまえは？」

やっと仲間の一人が聞いた。

「え、あ、ああ、まだ決めてない。」

「あつそ。」

それだけだった。なんだか、憂鬱な気分になった。

「進路？好きにすれば？」

母は言った。

浩介はぼんやりと考えていた。進路指導室にも行ってみた。すると、なにやら、隣から声が聞こえてくる。

「いいか、坂本、お前なら、もっと上にいける。どうして、この高校なんだ？」

「第一希望です。」

「しかしなあ。」

なにやら出した希望の高校のことで、先生に説得が行われている

ようだ。なぜか、浩介は落ち込んだ。自分には誰も説得どころか、気にもされていない孤独感が襲ってきた。

指導室を出ると、廊下で、あのがたいの大きい生徒と、帰ればと言った生徒がなにやら、話している。

「お、一緒の高校希望か。」

「うん、あそこなら家の手伝いにもそんなに影響しないしね。」

「ああ、大事だよなあ、それは。」

浩介は、彼が弁当屋だということ思い出していた。そして思った。行きたいという希望があるということ、なにかに縛られている幸せを。

「お、出てきた。」

説得されていた生徒が、出てきた。振り返ると、なるほど、秀才と言われている奴がいた。「玲。どうだった？」

「ん？問題ないってさ。」

「いいなあ。」

三人仲良く、なにやら話している。説得さえもされていたくらいだ。たしかに、問題はないのだろう。しかし、なぜか浩介はこのとき、意地悪を言いたくなった。

「俺、聞いたぞ。もっと上の高校にいけるんだってな。」

「そっなのか？」

「ああ。でも、行きたい高校を希望として出しているんだ。君は、どこに行くんだ？」

浩介は言葉に詰まった。

「別に。」

それだけというと、その場から離れていった。後ろから笑い声が聞こえてくる。どうやら、浩介の言葉は、なんの影響ももたらさなかったようだ。自己嫌悪に陥った。

食事中に母親が言い出した。

「なんか、あんた最近、静かね。」

「そお？」

「どうかした？」

母親でさえ、聞くと言うのはかなり静かだったのだろう。

「別にいー。ご馳走さまー。」

そのまま、月日は流れ、二年に上がると、仲間たちとは見事にクラスが別れた。誰もいない。その代わりに、進路室の前であった三人と一緒にクラスになった。まだ、浩介の憂鬱は続いていた。

しかし、偶然とは恐ろしいもので、化学の実験と体育の時間が同じ班に分類された。浩介はひたすら、黙っていた。当然、会話を聞くことになる。言いたいことを言って、なにやら楽しそうだ。科学の時間は、玲の言うことに行動し、体育の時間は進の言うように行動していた。

そんなある日。

「あ。」

また手前でパンが売り切れた。となりににはあの時と同じように隆史がいた。

「あ、いる？」

「黒田。いや、いい。」

教室までの道を歩き出した。当然同じ教室に戻るのだから、一緒に歩くことになる。

「でも、腹減るよ？」

「お前の家、弁当屋だろ、なんでパンなんだ？」

「ああ、余ったら弁当にも持ってきているよ。けど、パンが多いかな。岡本君だって、普段は弁当だろう。」

「なんで知ってるんだ？」

「だって、広場の隅で食ってるじゃん。」

「それは、そうだけど……。」

普通、人がなにを食べているかなんて見ているものだろうか？
昔からの知り合いなのか？」

「え？」

「あの二人と。」

「ああ、玲と進？いや、中学入ってから知り合った。」

「ふーん。」

そこに、去年のクラスメイトが通った。同じような仲間で。そのうち、一人だけ気がついてちよつと手を上げて笑った。声もかけることもなく、そのまますれ違った。浩介もちよつと手を上げた。

「友だち？」

「前のクラスメイト。」

「ああ。いいね。」

「なにが？」

「俺、前のクラス、友だち、玲だけだったから。」

「お。パンは買えたかー。」

進は手を振った。

「うん。で、黒田君のぶんがなくなった。」

「ええ？お前、食いすぎなんだから、やれよ。」

「いや、いらぬ。」

「だけど、次、体育だよ？」

玲も言った。

「いいんだ。」

浩介はそのまま教室に戻っていった。そして、机に伏して寝た。たしかに、腹が減った。しかも、そんな日に限って、マラソンだった。やけに太陽が強いような気がするの、きのせいだろうか。

「あつちいー。」

「やけるー。」

あつちこつちで、生徒から悲鳴のように聞こえた。

「ほら、行くぞ！」

先生の号令でぞろぞろと走り出した。だらだらしながらも生徒がついていく。学校の周りを走るのだ。外に出る分、景色もいいが、道は悪い。

浩介は、なんだか、気分が悪かった。しかし、そんなことも言い出せずに、走り出した。

だんだん、視界が白くなっていくような気がした。どこかで、誰かが何かを言っているようだったが、頭に入ってこなくなった。そして、意識が途切れた。

目をあけると、そこは保健室だった。

「あ、目、覚めた？」

「俺は？」

「マラソン中に倒れたの。暑さでやられたのね。昼ご飯、食べた？」

「いえ、なんだか、食欲がなくて。」

「だからよ。そうそう、あなたを運んできてくれた子がカバンも持ってきてくれたわよ。ここにあるからね。」

「運んだ？」

「そう。なんだか、調子が悪そうだったからって、後ろを走ってくれているみたいよ。倒れそうになったところを支えたから、顔とか打ってないんだからね。あとで、お礼を言わないとね。」

「誰でした？」

「同じ、体育のチームだといっていたけど？」

「ノックされ、がらりとドアが開いた。」

「お、生きているか？」

「林田君。」

「おい、岡本、生きてるぞ。」

廊下に誰かいるのか、声をかけた。

「勝手に殺すなよ。」

聞いたことのある声がしてきた。

「大丈夫だったか？」

玲と、隆史がやってきた。

「なんで？」

「なにが？」

「なんで、ここにくるんだよ。」

「放課後だし。」

「いや、意味わかんねえし。」

浩介が言った。

「うーん。お前が重かったからかな。肩こっちゃって。ま、運んだの、隆史だけど。」

「なんで、お前の肩がこるんだよ。あ、黒田、運んでくれて、ありがと。」

「いや。調子の悪いのに気がついたので、進だし。」

「いや、玲が調子が悪そうに見えるって言うから、見てただけ。」

「はいはい、仲良しいいから、調子が良いなら帰って頂戴。ここは保健室なの。」

先生に追われるように追い出された。

「じゃ、俺は帰る。」

「おー。」

玲は走っていった。

「急いでたのか？」

「バイトがあるからね。俺も先に行く。店の手伝い、あるし。」

「おー。」

そして、進と浩介だけが残った。

「なんで、助けたのさ？」

「いや、俺、なにもしてないし。」

「……。まあな。」

ふと見ると、窓の外を前のクラスメイトが帰っていつていた。ため息をついた。

「なんだ？まだダルのイのか？」

横を見ると、進が見つめていた。浩介は無意識に笑った。

「いや、平気。」

浩介は、自分を心配してくれるような友が手に入った、と思った。

それぞれの幸せ

そして、自分もなにかしようと思った。
浩介はちよつと、幸せになった。

4話 真雪の場合

真雪の場合

真雪がいつも、真夜中に見つめていたものは、空飛ぶ皿だった。皿だけではなく、他にも、いろいろ飛んでいた。ただ飛んでいるだけなら、いいのだが、実際には落ちて大きな音がしていた。「いいかげんにしなさいよ！」

女が怒鳴る。

「真雪が起きる！」

男はたしなめる。

「離婚よ！」

ひたすら、両親の争いは毎日のバトルのように繰り広げられていた。

ある日の朝。

母親はいつもどおりに娘を学校へと見送った。

そのまま母親はどこかへ行ったきり帰ってこなかった。

それは、真雪が小学校に上がったばかりのことだった。

そのまま月日は流れ、真雪は小学校三年生になっていた。

その日の夕方。すりむけたひざに貼るバンソウコウを探していると真雪は、テーブルの上に、封筒がおきっぱなしになっていることに気がついた。これはたしか、父親が明日必要だと、昨日言っていた物だと思い出した。

コートを着て、真雪は暗くなり始めている街へと出かけていった。

店の前に行こうとしたが、こっそりと覗いてみると、店の前には酔っ払いがたくさんいる。それに小学生では入れてもらえないかもしれない。真雪は店の裏に回った。しかし、店の裏も閉まっていた。

困っていると、偶然のこの道に入ってきた酔っ払いたちに声をかけられた。

「どうしたんだい、お嬢さん、こんなところで。」

「俺たちと遊ばないかい？」

酒のおいがぶんぶんする。

「やめてください！」

真雪は手を振り払った。

「なんだ？」

男の一人が大声を出した時に、店の裏のドアが開いた。真雪を見るなり、駆けつけてきた。

「あらあら、どうかしました？」

さすがに、気が引けたのか、男性たちはなんだか、よくわからない言葉を投げつけて去っていった。

「どうしたの？誰かに会いに来たの？」

「はい。ここに、和人っていませんか。」

「ああ、いるわよ。和人さんのお嬢さんね？入ってらっしゃい。」

店の中に入ると温かい。どうやら、彼女はビールのケースを外に出すために、裏から出てきたようだ。

「あれ、あなたの子？」

バーテンダーが聞いた。みかけは美しいが、声が低めだ。

「違うわ、うちのは男の子だし、もっと大きいわ。ここで、待っていてね。つれて来るから。」

「はい。」

真雪は椅子に座ってじっと待っていた。やがて、女装した父親があらわれた。

「どうしたの、こんなところまで？」

慌てて、和人は顔を出した。

「これ。忘れたでしょ。」

「あ、ああ！わざわざ持ってきてくれたの？ありがとう。」
父親の感激をよそに、真雪はあっさりと言った。

「じゃ、帰るね。」

「うん。」

しかし、慌てたのは女性だった。

「待ってよ、一人で帰すの？危ないわよ！なにかあったらどうするわけ？」

「大丈夫です。」

真雪はさらりと言った。

「そんなわけないでしょ。一緒に行くわ。」

「え？」

真雪は目を丸くした。

「送ったら、戻ってくる。」

女性は急いでエプロンを外して言った。

「さ、行きましょ。マスターに言っというて。給料から引いてもいいから。じゃあ。」

寒い中を真雪と女性は無言で歩いた。ときどき、道を確認しながら。

「あの。」

声を出すと、息が白くなる。

「なにかしら？」

「お父さんのことが好きなんですか？」

「和人さん？ええ。いい人だと思うけど。」

「ダメですよ。」

「え？」

「父には男性の恋人がいるんです。佐藤さんって言ってます。」

女性は目を丸くした。やっぱり知らなかったのかと、真雪は思ったが、彼女の目を丸くさせたのはそこではなかったようだ。

「知っているの？恋人のこと。」

「え、ええ。」

「すごいわ、和人さん、ほんとにあなたには、なんでも話しているのねえ。やっぱり、素敵なお父さんねえ。」

真雪は奇妙な目で女性を見つめた。

「あの。父のこと好きなのは……。」

「あら、好きよ。男性としてではなく、人としてね。」

「人として……。」

「ええ。私にも息子がいるの。だから子供を育てる大変さはわかる。それにこの仕事じゃ、あまりあなたに時間はさけない。どっちかといえは、すれ違いの生活になるでしょう？それでも、いろんなイベントに出て、店でも子供がいることを隠さずに幸せそうに話しているわ。自慢の娘だって。」

「そう……。なんですか。」

「ええ。子供がいても隠す人もいるけど、和人さんは最初から子供がいるってことを伝えて店に入ってきたのよ。」

「そうなんですか。」

「珍しいって、みんなが言うけど、それだけ、あなたのことを一番に思ってるってことでもあるわよね。伝えてあれば、なにかあったときに休めるし、駆けつけることだってできるし、連絡だって取れる。そうでしょ。」

「……。あ、ここです。あの、送ってくれてありがとうございます。」

「いいえ。礼儀正しいいいお嬢さんに和人さんは育てているのね。」

火の元には気をつけてね。」

「はい。」

「じゃ。」

その女性はにこやかにまた寒空の中を歩いていった。外は寒く、アパートの中も温かいわけではなかったが、真雪の心の中はじんわりと温かくなっていた。

そして。

「綺麗ねえ。」

「お母さん。」

ユキは真雪の姿にうつとりと見とれた。

「いままでありがとうございしました。」

「いいのよ。」

女性二人は涙ぐんだ。

「いいかい、やあ。綺麗だな。」

「お父さん。パパは？」

「和人はちよつと……。」

佐藤氏はなんだか、ためらうように言った。ロビーを覗くと、それは遠くからでも聞こえてきた。大泣きしているのだ。

「パパ。」

「真雪……きれいよおおおー」

「そんなに泣かないでよ。みつともない。」

「だってえ、だってええええ……。」

とにかく、泣き止む様子は無い。

「パパ、パパも今までありがとうね。」

真雪のその言葉にさらに涙が出るようだ。

「わあああああー……。」

式の間、ずっと和人は泣きつづけていた。

「ありやあ、あとで水分取らせないと、倒れるかも。」

「進さん。そうね。パパのほうが私よりも、感動しているわね。」

二人は笑った。

これから先に、どんなことがまっているかなど、誰にもわからない。

もしかしたら、進むと別れることになるかもしれない。

それでも、真雪には幸せだった。いまの幸せが続くようにと、指輪に願いを込めた。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8956a/>

それぞれの幸せ

2009年2月23日17時02分発行